記　事

例会記録

日本医史学会3月例会　平成24年3月24日（土）
順天堂大学医学部11号館16階北フロア

1. 曲直瀬玄朔の事跡と医書出版　天野陽介
2. 「東京府下死亡一週表」等の新資料にみる明治中期わが国の週（月）・年齢・地区別死亡　逢見憲一

日本医史学会4月例会
シンポジウム“富士川游先生と富士川英郎先生”
平成24年4月28日（土）
順天堂大学医学部11号館16階北フロア

1. 富士川游先生のこと　岡田靖雄（青柿舎）
2. 富士川英郎と日本医史学　富士川義之（富士川英郎先生嫡男）
3. 富士川游“醫箴”“醫五不可”の心を現代医療に役立てる　桑原正彦（広島県安佐医師会，生命倫理・富士川游顕彰委員会委員長）
4. 京都大学附属図書館「富士川文庫」と安藤昌益研究　石渡博明（安藤昌益の会）

日本医史学会5月例会　平成24年5月26日（土）
順天堂大学医学部11号館16階北フロア

1. ヴェサリウス『ファブリカ』の筋肉人図における人体表現の形態学的分析　阿久津裕彦
2. 浅井国幹顕彰会の足跡　安井廣迪

例会抄録

東京・青山霊園ハルツホルン（Henry Hartshorne：華爾都保崙；乞治呵倫）の墓

樋口　輝雄

Henry Hartshorne（以下「ヘンリー・ハーツホン」）は1823年3月にアメリカ・ペンシルベニア州フィラデルフィアで生れ，1897年（明治30）2月，東京で没した．1860～70年代に刊行した医書は，明治初年に桑田衡平や長谷川泰，小林義直，太田用成らが和訳したが，当時は著者名を「ハルツホルン」「ハルツホウルン」「華爾都保崙」「乞治呵倫」と表記して，「華氏」と略記した．1869年初版の著書“A Conspectus of the Medical Science: comprising manuals of anatomy, physiology, chemistry, materia medica, practice of medicine, surgery, and obstetrics, for the use of students”は，解剖，生理，化学，薬剤，内科，外科，産科のいわゆる「医学七科」につき図版を多用して平易に記述した．わが国でも「解体説略」「解剖摘要」「産科摘要」などの書名で同書各篇が訳出され，1871年発行の第2版は太田用成らが『七科訳説』の書名により浜松で上下巻を出版した．Gray（虞列伊）の解剖書やLudlow（律度羅）のManual of Medical Examinationなど多くの英米系医学書が幕末から明治初期に訳出されて普及したが，阿知波五郎氏は近代ヨーロッパ医学の系譜を講究され，英米系，特にペンシルベニア大学系の医書の本邦医学界に与えた影響について詳述している（阿知波五郎：近代日本

の医学，西欧医学の軌跡，思文閣出版，1982年）．

1867年初版の“Essentials of the Principles and Practice of Medicine: a handbook for students and practitioners”はPart 1，Part 2の2部構成で，1869年第2版および1874年第4版の“Part 2. Special Pathology and Practice”を桑田衡平が『内科摘要』『改訂内科摘要』，第4版の“Part 1. Principles of Medicine”は長谷川泰が『病理摘要』の書名で刊行している．

ハーツホン家はフレンド派（クエーカー教徒）の医家として著名で，ヘンリーは，ハヴァフォード・スクール卒業後，1845年ペンシルベニア大学医学部を卒業しMDのdegreeを受領した．フィラデルフィア市内で開業，母校等で衛生学，病理学を講じ，1884年に同大学から名誉法学博士号（Honary LL. D）を授与された．1893年に娘のアンナを伴い初来日，1894年に再来日して1897年2月10日死去，翌11日に東京の青山青山霊園外人墓地に埋葬された

父ヘンリーと来日したアンナ・C・ハーツホン（1860–1957）は，津田梅子とともに女子教育に尽力し，津田塾大学の発展のために多大な貢献をした．アンナの功績を顕彰し，東京小平に竣工した津田英学塾本館校舎は「ハーツホン・ホール」の名が冠せられ，現在は東京都歴史的建造物にも指定されている．アンナはフレンド派の新渡戸稲造とも親交があり，新渡戸は著書『武士道』序文でアンナに謝辞を捧げた．生前，青山の地を「Hill of Love＝愛の山」と称えたヘンリー・ハーツホンの墓所は，青山霊園南1種イ4側36番9にあり，現在は津田塾大学が管理し，墓誌には「津田塾大学の恩人Anna C. Hartshorneの父」と刻む．その来歴は手塚竜麿氏や武内博氏の著書に詳しい．ハーツホン父子と津田塾大学との関わり，特に津田仙と梅子父子については吉川利氏が，そして最近では亀田帛子氏が『津田梅子とアナ・C・ハーツホン，二組の父娘の物語』（双文社，2005年）の中で，縷述されている．成書は津田仙が持ち帰ったハーツホンの著書を桑田衡平が訳し『内科摘要』の書名で刊行したと伝える．しかし，桑田衡平訳「袖珍薬説』（明治3年）凡例には，「原書ハ亜国医員慧蕝（ウェーゼス）氏ノ編集ニ成レル一千八百六十六年刊行ノ書ニシテ丁卯ノ秋友人津田氏亜行ノ帰路携来テ贈ル所ナリ書名ハ『ポケット，ドース，ブウック』ト題シ」云々と記載され，津田が持ち帰った原書とはWythe, Joseph Henry: physician’s dose and symptom book, 1866.であろう．同1866年版は未見だが，国立国会図書館所蔵の1876年版は14×10cmのポケット判サイズで，表紙には“WYTHE’S POCKET DOSE BOOK”と印字されていた．

『中外医事新報』や『東京医事新誌』の記事によれば，1894年（明治27）4月14日，桑田衡平，松山棟庵，新宮凉園，杉田武，小林義直が発起人となり，日本橋浜町一丁目の日本橋倶楽部にハーツホンを招待し懇話会を開いた．発起人総代の桑田衡平が開会の辞を述べ，ハーツホンが演説したが，当日の来会者は発起人のほか高木兼寛，実吉安純，三宅秀，土岐頼徳，田代義徳ら60余名で，その演説内容は『成医会雑誌』に掲載されている．

なお，桑田衡平は明治14年以降，病気療養のため公職を離れ赤坂檜町に退隠，教育事業に尽瘁したという．明治38年（1905）に没したが，三十三回忌の昭和10年，嗣子桑田権平は宅地1,931坪余を赤坂区に寄贈した．乃木神社の斜向かいの旧居跡地は公園緑地となり，桑田記念遊園と命名し顕彰碑が建立された．いま，遊具が配された公園の中から生い茂る樹木を透かして，間近かに東京ミッドタウンが聳える．

（平成23年10月例会）